

愛情注入一定の法則

渡辺利夫

(拓殖大学学事顧問)

一九三九年、山梨県生まれ。七十一年、慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程修了。経済学博士。筑波大学、東京工業大学教授などを歴任。拓殖大学国際開発学部学部長、学長、総長などを経て、二〇一五年十一月より現職。

東日本大震災後に、とあるペットの救援ボランティアグループから貰い受けた雌猫と一緒に暮らしている。猫といえばその本性は「ジコチュウ」だが、

ほんと、彼女の自己中心的な行動は小気味いいほどである。老夫婦一人だけの小さなマンションにもかかわらず、振る舞いはまことに自由気まま。食べ物がほしい、撫でてほしい時（グルーミング）には近づいてくるが、そういう時以外はどこか人目につかないところで大抵は寝入っている。

夜十二時頃、私が居間でその日の新聞を読むている頃に、彼女、決まつたように足元に近づき見上げてニヤーの一言で要求を伝える。自分の体をグルーミングしてほしいと、はや床にごろんと寝ころがり腹をみせて用意万端である。腹やら背中やら顎やらをゆつくり撫でまわしてやる。十分くらいで満足らしい。満足するや、呆気ないほどにさつと「踵^{きびす}を返して」自分の寝床に去っていく。体を撫でてやる時間は十分ぐらいでないとダメ、五分ほどでやめてまた新聞などを読み始めると、要求はなおづづく。不

全感が残っているのだろう。私は勝手に「愛情注入一定の法則」といつているのだが、これ、人間にも当てはまりそうな気もする。

幼少期に母親や家族から存分の愛情を受けて育った人間の「親離れ」は早く、自立した人間として生きていくのであろう。逆に、幼少期に一定の愛情を注がれることのなかつた人間は、親離れがなかなかできず、ひょっととして親の「子離れ」もできにくいくらいはないか。幼少期において母子関係、父子関係、家族関係がスムーズにいかず緊張を孕んだりしたものがだつたりすると、否定的な自我が形成され、その後の人生の過程でさまざまな心理的葛藤を抱え込むことになるのではないか。肯定的な自我を育むのに人間の自立にとって最も重要な、つまり「根柢的信頼感」なのであろう。一匹の猫と暮らしていると、自然生命体の基本がどういうものであるかが理解できよう。幼少期に家庭内で培われた人間への信頼感が、